

2024年7月7日（日）主日朝礼拝説教

『捨てられた石』井上隆晶牧師

使徒言行録4章5～12節、マルコによる福音書13章1～13節

①【これらの大きな建物を見ているのか】

イエス様が神殿の境内を出て行かれるとき、一人の弟子がいました。「『先生、ご覧ください。何とすばらしい石、何とすばらしい建物でしょう。』」しかしイエス様はこう言われます。「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。」（1～2節）

皆さんは大阪城に行ったことがありますか。大手門に入ると、目の前にもものすごい巨大な石垣が現れます。たぶん加藤清正が運んできた石だと思えます。日本一の大きさではないでしょうか。イエス様の弟子たちも神殿のりっぱな石や建物に見とれ、それを誇りました。当時の神殿はヘロデ王が紀元前19年に着工し、10万人の労働者と1000人の内装職人を使って紀元後70年に完成しました。約90年もの歳月をかけて作ったものです。イエス様の当時はまだ工事中でした。しかし完成した翌年にローマ軍がエルサレムを包囲し、町に火をかけ、完全に破壊されてしまいました。何という皮肉でしょう。この世の物というのはどんなに立派に見えても、必ず崩壊するとイエス様は言われたのです。

ここでイエス様は弟子たちに「これらの大きな建物を見ているのか」と言われました。人は美しく、大きく、強く、立派なものに目を引きつけられます。これなら大丈夫、これなら確か、安心だと思えます。でもイエス様は「お前たちはこんな物を見ているのか」と言われたのです。皆さんはどうですか？何を見えていますか。私たちが見なければならないのはキリスト本体です。私たちキリスト教徒にとってまことの神殿とは、イエス様ご自身です。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」（ヨハネ2:19）といわれたからです。イエス様はユダヤ人から「捨てられた石」ですが復活し、それが隅の親石となって、その上に教会が建てられました。地上の目に見える神殿は消え去りましたが、キリストという神殿（教会）は復活し、永遠に残り、世界に広がりました。そしてイエス様に結ばれた信徒一人一人もまた神殿であり、その親石の上に積まれた石なのです。ペトロはこう言っています。「主は人々からは見捨てられたのですが、神によっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家を造り上げるようにしなさい。」（Iペトロ2:4～5）教会は永遠に存続します。永遠に生きているキリストという土台の上に建っているからです。しかしキリストから離れれば、どんな大教会でも崩壊し、消えてゆくでしょう。教会は建物ではありません。中身です。どういう信仰を持ち、どういう礼拝をし、どういう信徒がいるかです。教会の中心はキリストです。キリスト以外のものを頼り始めたら、教会は崩壊します。何を土台に、何を支えに信仰しているかです。

②【キリスト教の終末論】

弟子たちは神殿が崩れると聞いて「そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか。」と尋ねます。ここからイエス様は世の終わりに現れるしるしについて語られます。偽預言者、戦争、戦争のうわさ、地震や飢饉、国々の対立、キリスト教徒の迫害、親子の分裂などが起こると言われます。これらは今までどの時代にも起こってきたことです。第一次、第二次ユダヤ戦争、(マルコ 13:14 節以下はこれについて書いている)ローマ帝国の崩壊、第一次世界大戦、第二次世界大戦、中世のペスト、20世紀の新型コロナパンデミック、これらが起こるたびに人々は世の終わりだと思いました。政権が交代したり、大きな自然災害や大飢饉が起こる時代には、きまって無数のカルト集団・新興宗教が現れて来ました。

●先日 TV で、今の異常気象によってこの夏に起こる4つの現象について大学の先生を呼んで話していました。①豪雨、②暴風、③干ばつ・森林火災、④氷山の氷が融ける、です。今年も異常な暑さで、サウジアラビアのメッカでは50℃になり巡礼者たちが1000人以上無くなっています、インドも猛暑、南米も猛暑で、森林火災や豪雨による災害が起こっています。日本の周りの海水の温度が今年も平均より7℃～8℃も高いのです。2000年から急激に地球の平均温度が上昇しており、もう限界を超えていて元に戻すことは不可能とされています。大変な時代になりました。国連事務総長のグテーレスさんは「人類は地獄の蓋を開けてしまった」といいましたが、ますますこの世は悪くなるでしょう。戦争なんかしてる場合ではないと思いますが・・・

聖書にははっきりと預言しています。世界は螺旋状に崩壊に向かって進むのです。螺旋状というのは、一気に悪くなるのではなく、悪くなり、また少し良くなり、また悪くなり、また少し良くなり交互に現れながら、世界は崩壊に向かって進みます。良くなることはないのです。この世界は崩壊します。人間の善意や正義や平和運動くらいで世界は変わりません。それは肝に銘じておくべきです。人間に期待してはいけません。「人間に頼るのをやめよ。鼻で息をしているだけのものに。」(イザヤ 2:22)です。ペトロも言っています。「万物の終わりが迫っています。」(Iペトロ 4:7)、「現在の天と地とは、火で滅ぼされるために…取っておかれるのです。」(同 3:7)使徒たちは、この世は滅び去ることを知っていました。それはキリスト教がずっと語り続けて来たことです。

③【キリスト教の希望はどこにあるのか】

では、どこに期待したらよいのでしょうか。イエス様は7節で「慌ててはいけません。そういうことは起こるに決まっているが、まだ終わりではない。」とか8節では「これらは産みの苦しみの始まりである。」と言われました。「キリスト教の終末論」について整理しておきましょう。イエス様が十字架にかかれた時、不思議な現象が起こりました。「昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた」(マルコ 15:33)のです。旧約聖書には「主の日」と呼ばれる世の終

わりの日が来ると書かれており、その日には太陽が暗くなると預言されています。

「その日が来ると、と主なる神は言われる。私は真昼に太陽を沈ませ、白昼に大地を闇とする」(アモス 8:9) ですからイエス様の十字架と共に、世の終わりは始まったのであり、やがて世の終りは完成するのです。神の子の体が破壊されたのに、この世が破壊されずに残るはずがありません。ですからイエス様の十字架から終末の時代に入ったのです。今も終末の時代です。しかしそれと同時に、キリストの復活によって万物の回復も始まり、やがて新しい天と地が降ってきて、万物の回復は完成するのです。ですから不思議なのですが、万物の終わり、万物の回復が同時に進行しているのが今の時代なのです。でも何も驚くことはありません。ノアの洪水の時もそうだったからです。箱舟の中は古い世界でしたが、箱舟の外には新しい世界が始まっていたからです。これがキリスト教の終末論です。今起きている異常気象は、古い世界が終わろうとしているうめきであり、新しい世界が生まれようとしている産みの苦しみです。エデッサの聖フェオドルは「人間は死とそれに続く状態へと旅をしているのだという自覚を持つ時、この世の生に意味を持つ。」と言っています。

復活を知らないこの世は、この異常気象を見て不安になり、絶望するでしょう。でも私たちキリスト教徒はキリストとその復活にのみ希望を持っています。この世の終わりに現れる様々な現象は、私たちの信仰を鍛え、私たちの信仰を試すものなのです。榎本保郎牧師の本の中にこんなことが書かれていました。

●「最近、主にある一人の兄弟から便りをもらったが、その文中に、戦時中ある有力な牧師が教会の集会で国防献金を強く説いたので、「聖書のキリスト教はどこにあるのか」とただすと、「あなたの申されるような事、壁に耳あり、このような発言には注意していただきたい。教会のために迷惑である。」と言われたとのこと書いてあった。」

世と世に属する者はふるいにかけて消えてゆきますが、キリストに属する者は永遠に残ります。十字架によって死は終わり、万物は命を吹き返しました。十字架によって呪いは終わり、天のあらゆる祝福が人間に降って来ました。あなたの罪も呪いもすべて、キリストの所で終わったのです。そしてあなたは新しい者となったのです。キリストの十字架は、神が人間の苦難と死を共に背負っておられる「しるし」です。キリスト神がそこにおられるなら、どんな悲惨な場所でも、そこは必ずエデンの園へと回復するでしょう。だから今日という日に、自分の信仰を鍛えなさい。キリストが大木のように、確かに見えるようにしなさい。キリストから離れず、ぶれないで信仰生活を続けてゆきましょう。